

『東北・三陸道名物井づくりプロジェクト』を開始! ～ 利府町観光協会とイオンイーハートの挑戦～

三陸沿岸の美味しい海の幸・山の幸を使った新たな名物井を通じて、地元食材の美味しさと、被災地の生産者や食品加工業者、飲食店主が頑張っている姿を全国に向けて発信し、東北の復興に貢献したい。そのような思いから、利府町観光協会と(株)イオンイーハートが共同で『東北・三陸道名物井づくりプロジェクト』を開始しました。



3月4日、同町で行われた海産物収穫祭において、プロジェクトの立ち上げを発表するとともに、試食として3種類の井を約350食提供しました。当日のアンケートを参考に工夫した3種類の井に、町民が発案した井を加えて、4月29日～30日に行われるイベント『極うま井カップ』でお披露目します。このイベントはイオンモール利府で開催されるもので、審査員の審査と、イベント

に来場し試食した一般の方からの投票によって、『三陸道復興井』を決定する予定です。

この三陸道復興井として決定した井は、8月にオープンする春日パーキングエリア内のレストラン



利府町観光協会の職員と「リープちゃん」

で提供されるほか、利府町内の飲食店やイオンイーハートが運営する全国のレストランで販売が予定されています。また、井の売上金の一部は義援金として、被災地の復興に役立てられます。

利府町観光協会の会長である菅原幹雄さんは、「この三陸道復興井は、利府の食のプロジェクトの第1弾だと考えている。利府といえば梨だが、今後は海の幸など、これまであまり表に出てこなかった地場の特産品をPRしていきたい。地元の生産者や飲食店主と協力しながら新たな名物を開発していきたい」と話してくれました。

あなたも三陸道復興井を決める『極うま井カップ』に参加してみたいはいかがですか。

【問】 宮城県利府町観光協会事務局
022-356-3678

新たな加工場から 亘理の美味しさをお届けします



新たな加工場で作業を行う日下さん

亘理町で農産加工を行っている日下純子さんは、自家生産のブルーベリーなどをジャムやフルーツソースに加工し、亘理町内の直売所(おおくまふれあいセンター、鳥の海ふれあい市場)などで販売

しています。日下さんの技術力は高く、亘理町が主催する新商品コンクール『伊達なわたり生き生き大賞』では平成21年に『審査委員特別賞』を受賞しました。そのためファンも多く、ブルーベリーが食べ頃となる初夏には、収穫選別作業や加工作業が多忙を極め、その忙しさは寝る間も惜しいほどです。日下さんは「安心して新鮮な美味しさを皆さんにお届けしたい」という生産者の思いを込めて作業に励んでいます。

日下さんの自宅は地震による大きな被害を受けることはありませんでしたが、家業の酪農経営に様々な影響が生じたため、昨シーズンは製造数量を少なくせざるを得ませんでした。

日下さんは、限られた時間を加工のために使いたいと思い、自宅の隣にある作業場を加工場に改修することとし、加工場は晴れて1月に完成しました。個人の加工施設であるため、資金は全額自己負担となりましたが、日下さんは「やっと念願の加工施設を建てられました。これからはいつでもジャムやフルーツソースの加工ができます。今まで以上に品質の良いおいしい加工品をお届けしたいです」と話してくれました。

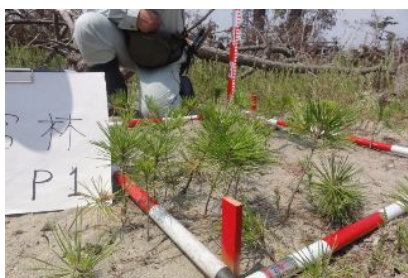
「震災に遭った方もそうでない方も全ての人に復興を願う気持ちを届けたい」初夏を迎える頃には、日下さんの思いが一杯に詰まったジャムやフルーツソースが直売所に並びます。

皆さんも、ぜひ日下さんのおいしい加工品を試してみたいはかがでしょうか。

起枯回青！次代へ繋げよう！ ～被災者の力を借りて海岸マツの 後継樹を育てる～

地震に伴う津波によって、沿岸域の海岸林は瞬く間に飲み込まれ、かつてない壊滅的な被害を受けました。仙台管内の海岸線には、総延長65キロメートルに及ぶクロマツ林がありましたが、ある所ではことごとくなぎ倒され、ある所では丸ごと流出し、また、ある所ではへし折られ、見る影もない状況にあります。

そのような中、仙台市宮城野区蒲生海岸の県有地の一角で、倒木の合間合間に奇跡的に生存しているクロ



生存していたクロマツ苗木

マツの苗木（稚樹）が発見されました。これらの苗木は、かつての海岸マツ林の後継樹で、海岸の生育環境にも順応しているため、この苗木を使えば、種子から養苗する期間を短縮することができます。また、海岸林の再生には膨大な数の苗木が必要であり、その供給不足を少しでも補うため、生存苗木の活用に取り組むこととしました。



被災地での苗木掘取り作業

苗木を掘り起こして養苗する作業には多くの人手が必要なことから、雇用創出基金の活用を

図り、被災によって失業した人々の雇用の場として作業に従事してもらう仕組みを整えました。厳しい生育環境下で、しかも津波を被った苗木は、非常に脆弱な状態にあることから、1本1本を優しく丁寧に、少しでも根を傷めないよう細心の注意を払いながらの作業でしたが、再生に向けた思いはきっと苗木達にも伝わり、いずれは地にしっかりと根付いて、たくましく育ち、再びあの白砂青松の見事な景観を形成してくれることと

～復興事業で繋がる「輪」～ 農地や農業用施設復旧を支える 頼もしい“助っ人”が来ました！

当事務所の農業農村整備部では、農地及び農業用施設の復旧工事や、市町の復興計画に沿った農地の復興に向けた事業計画を策定する作業を急ピッチで進めています。とはいえ、誰もが予想し得ないほど甚大な被害をもたらした大震災の爪痕は深く、復旧・復興に向けた業務は膨大です。

このような状況下、昨年に引き続き当事務所に頼もしい“助っ人”が駆けつけてくれました。平成24年度は、地方自治法に基づく農業土木技術者63人が宮城県に派遣され、そのうち約半数の30人が農業農村整備部に派遣職員(助っ人)として配属されました。

皆さんは、農地や農業用施設の復旧のために必要な知識と技能を兼ね備えた優秀な方々で、北は北海道から南は中国・四国



農業農村整備部ブログのキャラクター「なおこ」とパートナー

まで、全国各地から派遣されています。また、皆さんの東北・宮城の復旧・復興にかける思いは熱く、「県の代表として、1日も早い復興のため、全力を尽くす！」と語っています。

慣れない地で“助っ人”の皆さんが十分に能力を発揮するにはリラックスすることも大事な仕事の1つです。早くも、「ラーメン屋さんがおいしかった。宮城は量が多いね」という感想や、「東北の温泉地を巡ってみたい」、「観光地をゆっくりと見て回りたい」という希望など、それぞれに楽しみ方を見つけている様子で、仙台や宮城、東北の良さを少しずつ実感しているようです。

“助っ人”の皆さんは「復興のために全力を尽くし、更に東北・宮城の良いところを全国へ伝えたい。そして良いところは自分の県にも持ち帰りたい」と話しており、復興に向けて動き出した宮城の地で、新たな連携の輪が広がっています。

お問い合わせ先)宮城県仙台地方振興事務所
地方振興部(担当:鈴木、鶴飼)
(HP) <http://www.pref.miyagi.jp/sdsgsin/>
(E-Mail) sdsinbk2@pref.miyagi.jp
(TEL) 022-275-9140